**スポーツ・イノベーションとしてのアクション・リサーチの探索**

**－新潟県におけるアメリカンフットボール普及の取組を事例として－**

○髙橋孝輔（事業創造大学院大学 事業創造研究科 専門職学位課程）

丸山一芳（事業創造大学院大学 事業創造研究科 准教授）

1. 背景

　発表者は日本のアメリカンフットボールを活性化するために活動を展開しており、現在は新潟県アメリカンフットボール協会の理事と県内唯一の社会人チームの代表を務め、新潟県で活性化の成功事例を打ち上げるべく活動中である。

　新潟県におけるアメリカンフットボールの競技人口は2015年現在で約100名である。サッカーが約15,000人、バスケットボールが約14,000人でありラグビーでも約1,200人であるのと比べると、マイナースポーツの中でも普及が進んでいない状態といえる。マイナースポーツの普及にはこれまでのグラウンテッド・セオリー・アプローチによる研究のみならず、フィールドやコミュニティに研究者が入り込み、干渉し変化させるという一歩踏み込んだ課程を持つアクション・リサーチという手法を適用することにより、研究と実践を結びつける方法を追求することができると考えられる。

1. 目的

　マイナースポーツの普及におけるアクション・リサーチ適用の可能性について考察する。

　発表者がすでにコミュニティの幹部となっておりアクション・リサーチを取組みやすい状況である、新潟県におけるアメリカンフットボールとその派生スポーツであるフラッグフットボールの普及を事例として取り上げる。

1. 先行研究

　スポーツの普及については、「史的・事例研究」（大熊ほか(2005）、Kaufman and Patterson(2005)やHill et al.(2014)など）と「スポーツへの社会化」（Kenyon and Patterson(2005)、松岡(2012)やNational Coaching Foundation(2009)など）という二つの研究が主流となっている。前者は競技視点、後者は競技者視点からという違いはあるものの、理論の創出を目的としている研究である。

また、Lewin(1946)が提唱したアクション・リサーチは、前述の二つの研究とは対照的に研究者自身がコミュニティに介入し、他の研究では対象者となるコミュニティの人々も研究に参加するという特徴があり、実践を通じて知識を創出する手法である。アクション・リサーチの基本的な手続きは、①見る【Look】②考える【Think】③行動する【Act】のサイクルとなっている。すなわち、最初に参加者が研究する問題及び問題の置かれた脈絡を定義し、記述する。次に問題の性格とその脈絡に対する理科を拡大するために状況を分析し、解釈する。そして問題の解決策を策定し行動する。その後再び問題の記述へと戻る。アクション・リサーチはこの一連のサイクルを継続的に回していく。

1. 研究方法

新潟県のアメリカンフットボールコミュニティに対し、どのようにすればアメリカンフットボールが普及するかという観点でアクション・リサーチを行う。今回は研究者と干渉するコミュニティの幹部が同一人物となる。

以下アクション・リサーチの手法に沿って考える。

* 1. 見る【Look】

新潟県のアメリカンフットボールコミュニティは現在４つのチームに分かれており、すべて高校生以上が構成員となっている。

各コミュニティに新しく入ってくるメンバーは学生チームの場合はその学校に入学した県内外出身のアメリカンフットボール未経験者、社会人チームの場合は県外から新潟に転勤してきたアメリカンフットボール経験者が主要となっている。

学生チームの場合、卒業後は県内外出身者問わず県外に就職する者が多いため新潟県のアメリカンフットボールコミュニティから離れる者が多い。社会人チームの場合でも県外から転勤してきた者が多いため、数年後再び転勤する者が多い。

* 1. 考える【Think】

新潟県におけるアメリカンフットボールコミュニティの問題点として以下が挙げられる。

1. 流入が少ない

* メジャースポーツだと当たり前にある子ども、青少年が始める機会がない。

1. 流出が多い

* 全世代に渡って参加志向の競技環境が無い。
* 社会人以上で強い競技志向の環境が無い。
* 学生は県外出身者が多く、県内出身者であっても県外への就職することが多い。また、転勤でやってきた経験者の社会人は再び転勤によって離れ、新潟県内にアメリカンフットボール競技者が留まらない状況となっている。
  1. 行動する【Act】

新潟県にアメリカンフットボールを普及させるための解決策として以下を立案する。

1. 流入を増やす
2. 流出を減らす

　　　　先行研究を元に立案した結果、①についてはフラッグフットボールの普及、②については、社会人へのフラッグフットボールの普及、競技志向トップチームの結成によって解決を図る。

1. 現在の取組

　現在の取組として、総合型地域スポーツクラブでの体験会や、チーム単独での体験会を実施している。

1. 考察

現在の活動の中において、以下を認識して普及を行うことが必要だと感じている。

1. 参加者の年齢によって体験会の内容を変えることの重要性
2. 人と人との繋がりの重要性
3. 情報発信の重要性
4. 今後の課題

　さらに流入を増やすために小学校の授業で実施されるような働きかけや、フラッグフットボールチームの結成を目指していく。また、社会人チームの拡大、競技志向チームの派生、高校生以上のフラッグフットボールの競技環境整備などの流出を減らすための活動も行っていく。

1. 発表

発表においてはプレゼンテーション資料によってよりわかりやすいデータならびに分析の提示をおこなう予定である。

以上